

トと『キリスト教綱要』との間の作家カルヴァンにおける断絶、および『キリスト教綱要』について論じられる。第14、15、16章では、まず『不眠の魂』*Psycho-pannychia* (1534) で、宗教問題にアンガジェした一介のユマニストとしてのカルヴァンが、聖書と理性に裏付けされた権威を有する自己自身の一人称を居丈高に主張していたのが、祭司・職業神学者カルヴァンの著作『キリスト教綱要』第一版 (1536) にむけて、その一人称の存在が徐々に薄れてゆく過程、また、檄文事件直後の「王への書簡」(1535) および『サドレ宛て書簡』(1537) での、現実問題にかかわる弁護士として語る文体には、その後のカルヴァンの文体の特徴である無駄のない文章構成、簡素な文体がすでにみられること、最後に、大セネカのデクラーティオ風の激しい文彩の使用がその後の神学的著作に及ぼす影響、以上の分析を通じて『キリスト教綱要』にいたるまでのカルヴァンが自身の文体を模索する過程が論じられる。第17章では、神学者カルヴァンが『キリスト教綱要』のなかで教義と一体化し、一人称の存在がテキストから薄れ、さらに簡潔さを彼の文体の最大の特徴とするにいたるが、それは、真理を客観的に「教化」するためにほかならないことを示す。第18章は『キリスト教綱要』冒頭の神と人間の認識についての章の分析から、真理の「教化」の弁論的ジャンルについて論じる。聖書に含まれる神の啓示の教化は、魂の救いについて霊的な確信と慰めを与えるために必要かつ有用である。したがって教義もこの有用性を一般信徒に説き勧めるために、教化的ジャンルと勧告的議会的ジャンルが交互に現れる形で、メランヒトンの冷たい論理的秩序によらずに聖霊の秩序にしたがったカテシズム形式で明晰かつ簡潔に論じられるべきである。これに付随する形で、神の讚美と人間のむなしさの非難が褒貶的ジャンルで、論争的要素と神の啓示による人間に対する告訴が司法的ジャンルで弁じられる。第19、20章は、以上の目的のためにカルヴァンの用いた議論法の分析を扱う。理性的論理ではなく常識にもとづく修辭的論理が優先され、たとえば聖書解釈では、矛盾する章句を神学的にではなく説得的機能によって理解し矛盾を解消する。また、日常生活、常識的事柄から引かれる比喩は、

表象機能を重視する装飾としてではなく、聖書の寓話に似た類推的論証として機能する。以上は、読者と著者の共通の了解前提事項にもとづく議論法である。一方、読者にカルヴァン自身の論拠を納得させるための議論法としては、論題の提示法と関連諸命題の列挙、定義、また真理を二つの誤謬の中間に位置するものとしてとらえる排除と対立の論理が論じられる。この最後の点には現代的な弁証法の意味での「力学」を見出すことができる。

以下21章から24章までは、対照法を中心とした『キリスト教綱要』の文体面からの分析がなされる。第21章ではシメトリーと対照法の間の変遷と思想との密接な関係が、対照法に寄与するさまざまな文彩から説明される。もっとも一般的なのは、ゴルギアス文彩とよばれる三つの文彩（同一構造の従属節、同一或いは類似の語尾屈折・語尾変化、対照法）で、シメトリーの形をとるペリオッド（複数の従属節から構成される文）を構成する。あるいは、矛盾語法とよばれる二つの対立する語を併置し、警句を形成するセネカ風の文彩（例：「愚かさの知」）なども対照的效果を与える文彩である。この後、ミエ氏はカルヴァンの文体の二つのモデルを提示する。一つは、アウグスティヌスによって聖書の文体として指摘された、対立が頭語反復によって連禱式に強調される単純かつ壮麗な文体であり、もう一つは、簡潔なセネカ風の警句的文体である。ただし、カルヴァンはセネカのように警句の内容を難解なまま残すことなく、その前後でゴルギアス文彩なり、頭語反復なりの反復の文彩を用いた滔々とした文章でその対立的内容を説明する教育的配慮を省かない。周知のカルヴァン特有の文体的簡潔さが実は文彩の豊かさを排除するものではないことが指摘される。第22章の対照法とリズム、構文、ペリオッド構造との関係については、カルヴァンの文体の二つの特徴があげられる。第一に、論理的接続詞の反復（頭語反復）によって知的かつ明晰に構成された対立的二分構造をもつ均衡のとれた散文であり、第二に、この思想上、表現上の対立・対照がペリオッド文体に与える緊張と単純さのおかげで、カルヴァンの文体が16世紀前半に一般にみられる擬似キケロ風の錯綜した長々しいペリオッド